

和
今昔物語
卷十一
五十五

増4
775
204



あまのり 發句より 三びーとそりて かくる 一つ松
とあり

あまのり 發句より 三びーとそりて かくる 一つ松

門曾生
冊 773
卷 204

今昔物語部十一目錄

- 一 安房守文室清忠落冠語
- 二 伊豆守小野丑友目代語
- 三 中納言久長谷雄家忍語
- 四 大藏左衛門藤原清兼佈抽語
- 五 三善春家心托語
- 六 筑前守藤原章家侍頼方錯語
- 七 右近馬場殿上人種合語



今昔物語 傳部十一

○世俗傳

一 安房守文屋清忠落冠告

今むし本唐書文室清忠

按姓氏錄文室真人天武天皇皇子長屋王之後也

といふもの

かたむく方々の味もふ其うまはつた面はさうりける

そそ氣徳氣よ同をえり又出羽守大江時棟

大江系圖時棟不見

こころ者足七口時ふおれなり腰屋とて鳴なづらひるも

のせりい五人陳目のとれ陳の定め陣の法座よめされ

て清忠時棟あつて箱文ときぬりふ時棟あつて

てよとまりしてはすそくは忠が冠あつておち守守部

えとそくあひのさるおとくはりし清忠海へひてまよ

あつら冠をさるさしして箱文もたぬりていそおと

りり時棟は奇異氣なる氣をそめはれをさるさるそのお

世のさるふよあつていふものとあんさるうい五人ものふはり



えきまぐと興じつひのどくをく目代をてゆき
うきまぐとあるはつて思儀もよくいふことと
思儀もよくのどくはつてゆくはつて思儀もよく
しづみやま書文と次家氏もよく思儀もよくいふこと
とよその國の法目代もよくいふこととありぬばあむじしを
ワれえらぶ事もよくいふこととけりもよくいふこと
とちけりぬはつて思儀もよくいふことと思儀もよく
つてつてひらるかーえつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

三 中納言長谷雄家見書
今むく中納言長谷雄家の才賞く智廣く
及んでいふ人よくいふ人も思儀の方をばけりもよく
うきまぐといふ人よくいふ人も思儀の方をばけりもよく
とよその國の法目代もよくいふこととありぬばあむじしを

思儀もよく現すと但一人を花もよくいふこととありぬばあむじしを
其日々物をとすとつてしづみやま書文と次家氏もよく思儀もよくいふこと
とよその國の法目代もよくいふこととありぬばあむじしを
ワれえらぶ事もよくいふこととけりもよくいふこと
とちけりぬはつて思儀もよくいふことと思儀もよく
つてつてひらるかーえつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

先づ... 春家... 侍物... 錯錯

六 抗前守藤原章家侍物方錯錯

今... 源圖無... 抗前守... 侍物... 錯錯... 提中納言兼輔四代孫豊七後守義貞嫡子從五位下

之... 其器... 侍物... 錯錯... 提中納言兼輔四代孫豊七後守義貞嫡子從五位下

七 右近馬場敏久人行合器

今... 後... 敏久... 行合器... 提中納言兼輔四代孫豊七後守義貞嫡子從五位下

作者宇治大納言隆國兄

懐忠男太宰正二位

右近馬場中將源顯基俊賢男中納言

いふ事ハ心しちるるびす知事らうとてん
りはくちやなり

今昔物語十一

今昔物語部十二目録

- 一 比叡山無動寺義清河阿彌梨鳴呼繪語
- 二 東國入過花山院門無禮語
- 三 行徳寺系陳忠入谷語
- 四 以外術盗食瓜語
- 五 近衛河蝦蟆語
- 六 鳴呼者怖己影語
- 七 傳大納侍得鳥帽子語
- 八 於近江國孫魚入墓穴男語

て成て是の如くして多の異物もあらんがらふより
 まづ中へゆたりをばいりうりる終む事とせらんが
 ざらんがわい解者もくするなまの人もむせりけり
 りふむの如く存後のうもふたはくちうて真言くふ
 うりてちん人ふ人ふまはるる身はるる

二 東園人過苑印門方渡結

此下本文教行文字
 脱落不可解故除矣

今むし東の人今むりて苑印門と馬とさあふこ
 たり院の内より今ふかかきりて中門の辨をさ
 苑印とあふて印門の内へいさ入る中門の辨をさ
 のまう紙院にうりて付本とまうりて印門の辨を
 印門のおと馬とあふくすまふ紙のまうりて印門
 と印院をさとまうりてしりしりやみせり今ら
 まうりて印院をさとまうりてしりしりやみせり今ら
 之れ馬のた右の書は取之人は右の書と押して南東

ひき身院に寝殿の南西乃ち上廉の内をさげ流し
 秋庭をりりたるは印門と馬とさあふこ
 向く形つものるは印門と馬とさあふこ
 げはた者くさして現ありんばよむの辨をさ
 とま夏名の印門と馬とさあふこ
 居候の二並は延天四十寸りりる印門と馬と
 弓のうりやまるとお麻毛なる馬の印門と馬と
 七八歳程の二並は物なりた右の印門と馬と
 解りりり印門の下遊りておろる院は去の印と馬と
 池がさくさくは印門と馬とさあふこ
 うらば馬のよめくさりりる印門と馬とさあふこ
 らんりり馬平く成く勝取たりりる印門と馬と
 此下馬字をさくさく印門と馬とさあふこ
 西へくさりりさのひんりりる印門と馬とさあふこ

げいしゆりて此の筆とたつし息つぎてみりふは
下衆も此れを取か一切合けつらふ其意の者
もやん年いしむる新平は結とて杖よびを
あつ下衆もが情ふ居く此を取つゆりてその
るつらつ流くくも一咽喉かたて中見よ下
衆たのいし思ひ人の事には子物と物あつが
ゆつ下衆も取ひびびししを相いみて怪め人へ
年むら老とあえんしを本初下しを海り
たおが此れをくくつて下衆も戯言とてたつた
けいひ居るし箱儀はまのころあつけらぬ
の此とかりて畠のやうな下衆もが公に
のこ此と取あつあひあつしゆりて
とびりひらりたつて此れを化すあつて
く熱しつ下衆もえんしをい神をわが

はれろふとて此れと取て切ふあつて後下衆も
向ひて取らぬしやまじはかくはつて
下衆もまを道約人ともふてをさつ
くひはくし後お合ひぬりえんしを
あつてつらつそのらつ下衆も此と取
筆のさつて此の此をわつし
あつてむらびらつあつての
はくしやうまを此の此と取
中れと取つたえんし甲斐
く者もえんしと見あつて
此と取つたえんしと取つた
うれつと申すしは
此の者もとややま
とをさつたえんしと

五 近衛御門蝦蟇詰

とに身し、近衛の御門の内、大なる蝦蟇詰ありて、
此の平なる石のやま、してありしが、内、
是とゆゑ、多岐にたり人あり、
れり、安んずるの所、まゝありて、
関て、うら、これ、
この如房、まゝの、
蝦蟇詰、
此と、
が、
す、
た、
か、

大抵、
わ、
屋、
あ、
て、
ふ、
ち、
ぐ、
に、
う、
り、
そ、
き、
溝、

髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて...
髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて...
髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて...
髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて...
髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて...

六 鳴呼者怖己乳結

今む... 今む... 今む... 今む... 今む...
今む... 今む... 今む... 今む... 今む...
今む... 今む... 今む... 今む... 今む...
今む... 今む... 今む... 今む... 今む...
今む... 今む... 今む... 今む... 今む...

髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて...
髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて...
髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて...
髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて...
髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて... 髪を切りて...

とくそがめけとばうりふ守りゆりおもきとておけり
くはいものちくまうて何やんけとてあして次はうり
くうよの瓜五子のちり房の音き娘の入りち男おひん
えんおきとひの人といふとぬれうが雨の向は暮家入
うりゆんおしけとてあうりうは荷抱かぶりぬり
と申えしちを葉とぬきとてあうりうとてうり
房より後よ入る人うあうい暮家よ候や神やれする
は解とちりちり我いおぬぬうはが雨りうりちり
之のれが今知をうりといひて此暮家へ入くはあうり
てよぬきうりやうりてあばりゆの男是と聞てん
はまてちぬきうりてあうり解とちりありたぬは
うとてぬきうりうりてあうり解とぬきひんうり後
の男志うりあうりてあうりてあうりてあうりてあ
思あうりてあうりてあうりてあうりてあうりてあ

病と葉とてあうりてあうりてあうりてあうりてあ
やんぬりちりが解とぬきうりてあうりてあうり
よくてあうりてあうりてあうりてあうりてあ
はる候と解の候とぬきうり葉とあうりてあうり
のなりてあうりてあうりてあうりてあうりてあ
ちり候と解とて葉とあうりてあうりてあうりてあ
りちりてあうりてあうりてあうりてあうりてあ
やんぬんとあうりてあうりてあうりてあうりてあ
ちりぬりてあうりてあうりてあうりてあうりてあ
けてあうりてあうりてあうりてあうりてあうりてあ
申されてあうりてあうりてあうりてあうりてあ
ゆきうりてあうりてあうりてあうりてあうりてあ

今昔物語十二

今昔物語部十三目錄

○怪異傳

- 一 三條街洞院鬼殿靈語
- 二 桃園靈語
- 三 冷泉院練洞院僧都殿靈語
- 四 東三條銅精成人形語
- 五 在原業平中將奇為鬼被噉語
- 六 辨某為鬼被噉語
- 七 源公忠跡次血油化物語
- 八 伴大納言善雄為疫神語
- 九 於朱雀院被取解袋菓子語
- 十 近江國安義橋噉人鬼語
- 十一 東國人值鬼語
- 十二 產婦行南山科值鬼迹語

- 十三 平季武すけむね值あ姑う獲と鳥つ語り
- 十四 正親まさちか太た丈ぢ為な鬼おに被ひ殺ころ事こと語り
- 十五 狗いぬ為な夫と女めの語り

今昔物語 傳部十三

○怪異傳

一 三條街洞院鬼殿靈語

播磨子曰怪異傳古人取難
輕除見者所宜取捨附也

今むらへ三條よりこころ洞院より東の隅と鬼殿といふ
拾芥抄日三條南西 其下小靈あり是はみよこらいまを
洞院東有地宅靈所 いま京都御所みやこなるにありて
おのり 其色と聞のあやふし胡あやふし録あやふし負あやふしてさうらふあやふしがあやふし儼あやふし雷あやふし電あやふし雷あやふし霹あやふし靨あやふし
あやふししぬいへるぬいへるといふと馬より下りて
あやふし松のわりし居りりりりり雷あやふしなちかて人馬も々にあやふし
あやふし教あやふししうあやふしまあやふし好あやふしまあやふし田あやふし里あやふしやあやふしぎあやふしてあやふし雷あやふしふあやふしなりぬあやふしまあやふしちあやふし都あやふしうあやふし
あやふし傳あやふしりあやふしああやふしるあやふしてあやふしまあやふしふあやふし人のあやふしああやふしまあやふし成あやふしくあやふし伝あやふしへあやふしんあやふしどあやふしもあやふし雷あやふし雲あやふし其あやふしのあやふし
あやふし伝あやふしはあやふしくあやふしすあやふしてあやふしまあやふしぶあやふしくあやふしいあやふしちあやふしらあやふし半あやふしもあやふしああやふしらあやふしとあやふしなあやふしるあやふしり
あやふしさあやふしりあやふしはあやふしるあやふしちあやふしなり

二 桃園靈語

今むむう 権軍と云ふ今の世の寺也 拾芥抄曰一條北大宮西

政家本生自執親主又曰桃園の同世尊寺南保光

卿傳及如此說以桃園寺世尊寺為二處

西宮に在る位信の御入りの宿殿の存じの母屋の板より

帝定ありぬるあれは帝定より小き兒の御出たり人

とまひくひとありた長とんとつねにひたすらさあやとそ

穴のふら経ゆひ付けとぞもなぬけしものさしを佛とか

る一がともまびきり向あり人伝答のと二箱その穴より

入るを御方のちんろくはくしとまひくひ本ありしうは

す存答柄とぬきて微と穴よりちんろくはくしとまひくひ

まゆく本後ろくしとまひくひちんろくはくしとまひくひ

三 冷泉院東洞院僧都殿西靈諾

今むむう 冷泉院より南東洞院より東の洞と信

都殿よりひてありたありた冷泉院よりひいた本

宰相源氏義 敦實孫雅信子右の殿なり杖義の

中井正四位下

い波は守保是補 是忠孫清平

男從四位下 杖義の家乃をさなり是

補の家より見え凡の信都殿の成実のすみ小大は高見

板本あり波は守保は寝殿の前より赤き草衣花

りて板本のそえよのむろり 額は守の家は宿直より

男は草の花約とて射おとさんとしひろりよこれそ

く老ども射あそととあそふい老いれぞ射んとつひて

夕暮方より傍都殿より南面乃貴子より侍り東の

方の竹の中より赤き草衣花とゆれりかひ四男存保は

りつゝ射るる草衣花中と貫れりやう板本のすゑふ

のむろり草のありりこゑとる赤の地は血おる流さる

男家より帰るありそひつる老どもあひくは中より

降るども各取つてたれり其後射る男家なるん

夫よりゆりぞり本にまきかたりはさるる也

四 東三條銅指成人形諾

今むし東之條よ或部郷宮跡や中なる人位ひらり時
南よ長之尺をうりりる雷をきびくゆらぬ文あり
ゆひく陸陽脚よりいさしれちりよ是ハ銅器の精
りり衣己の隅に幸は物と申れは其末は之を解り
せられりよよみ斗入程の銅の掘りてせりそのとら
うの田のゆく半絶よりり 物の精はく人成て記す
るもあつたりはさえさうなり

五 在原業平中將幸為鬼被詔詰

今むし右道中將在原業平より人ありいさしきその
名好くそやそありやどの女のこころうらうらとさうとバ
あらう人とも人れむすめともこのえさなくさう瓜は
うてむじとさうりさうりある人のむすめさうさう
せよとせれてつらくしてて心瓜はてて微借しけれも
やんどあらん堀取とえといひて記どもゆりさうとさう

業平いさしきさうけうせんはふぬすさうとつれは
づき方あるさうは山神の色のたさ山庄のあれて今す
さうりちりか其家の内よ大さゆらあせ念ありかさうさ
かさうさうと敷と敷くけさとはさゆりて外さうさ
さうさ雷電霹靂してれさうしけれは中將かとうの
さうさやうてさう改てひめじらうさ雷鳴とあり
あもあらうされどもさうささうしとハ中將あやさ
うりさうささうさびと衣敷さうり妙さう中將あやさ
うてて着物さうさうあさげきさうりそれう後い念を
人取す念をさうさうの雷電霹靂念よはり鬼のさ
らさうささうはさえさうあり

六 其為鬼被詔詰

今昔宮の司は羽鹿とよふと瓜れさうさうと脱よ瓜は
さうさう人ありけりそのとれ年某ハ早くさうさう史の

居たりつゝ不眠^やさ^らし^て寝^る不^ふ寝^るさ^らし^て明^るる^ちを^たれ^おりて
れ信^とか^どろ^りし^後ひ^けも^はれ^信目^目瓜^瓜片^片を^て叙^とり^り
胡^胡條^條と^取て^おの^の方^方を^出ら^うそ^のち^をた^たあ^まり^不後^出
可^可く^斜儀^儀と^ひり^んと^て取^よせ^て用^をそ^おふ^不可^可
る^もも^入ら^う物^あら^うら^うや^ぎよ^れが^いあ^れ信^とあ^らく
こ^ろろ^よれ^信中^中ろ^ろを^れが^が白^あ地^ち目^めと^信り^解儀^儀よ^目
成^成放^放ら^儀ば^とそ^人も^もれ^儀の^儀と^おつ^らと^は斜^斜儀^儀と
と^ぬり^りて^殿の^下終^終を^取ら^うて^やぎ^て取^入て^れて^信
見^見の^儀ば^とそ^人も^もれ^儀の^儀と^おつ^らと^は斜^斜儀^儀と
思^思え^んの^儀の^儀ひ^りら^もや^らひ^られ^ば信^人を^れら^ら信^ら
と^とく^信の^あり^りと^同く^から^り付^えら^る也

十 道に國字義橋鬼噉人結

今むり道に守あり一人の翁よりたのちもあつて酒
を飲りあそびるにわづらある人中けりといふの字義

橋

道は國字義橋鬼噉人結

橋 道は國字義橋鬼噉人結
吉郎其處之橋欽
えらるやゆく人れ橋其の中小きあらしめあつる者もの有
あつるの字義橋の本は我もきあるあつては法館よあつて一麻毛
もたぬとてなきやきくつらんとやはらぬとらふ志
ありてあひひあらしめ守地をたて何事成つては
はれはあつるの本と申あつてとて守益ありとあつては
男をあつて馬とつてはやうにあり侍するといふは男
よのぬりさきなられはとてはとてはとてはとては
まうてははれよらうしてとてはとてはとてはとては
そ本のとてはよらうしては法馬と申はとてはとてはとては
とらふよらうしてはとてはとてはとてはとてはとては
たう男の馬の尾は油をぬくわらへ腹帯はとてはとては
よぬきこれ將袋米粒とて馬とてはとてはとてはとては
有りて人氣をくまらぬとてはとてはとてはとてはとては

さかして格のふはえつて牛ふ物そ叫ぶふてふりうんや
因ふる免あらんと神心ありしけ道行てえれば廿年の美女の
唐文のあやうりうは徳宗に紅の袴馬そ格の古柳より
アそ格の格馬よりゆくとす免もあはれえびりたきて約を
やとあはれななりも言よかり老のきざさやう外鬼のん
と名ひれして目尻をさびて打廻る儀らの女をあらざりて
アそけあくはさるあそかくさひけぬあ人の捨てきり人
ぞとゆておろしてふとて成園で男の毛よさうておろし
馬公をあらゆくとはい女あお格あるといお格とひびり
うとけりてより馬の尾とぬよとより他とゆりてれを
あやてぬとてしう本とぬり馬の鞍と打くるとすれを
化物もほびてけり馬の尻をさうてえれば面の色も赤いて
とて圓坐のてく目一つなく長八をさうりてくもの指さ
あり此の丑すやどはくもは深者にひく眼の光り虎の

やうもして政教の連のてく格をさうりて肝さえて怖
半うびりてゆとて馬馬よ素とれが格あく人里にをさ
そのとれは鬼よりあをさうりてはねをさうりてのて
うにけりやうもさうり馬の喘く流儀守る格よとを
ううを格の老もさうりてくとも同もさうりてのて
さひびりしはさうりて馬の尻をさうりてのて
ての馬とぬとて馬の尻をさうりてのて
とさうりて格の老もさうりてのて
とさうりてのてのてのてのてのてのてのてのてのて
日小成て門とてのてのてのてのてのてのてのてのて
奥守さうりて母と具とてのてのてのてのてのてのて
とさうりてのてのてのてのてのてのてのてのてのて
とも宿一のてのてのてのてのてのてのてのてのて

新あめめ多きの者もたはる日次しくゆれば今日口ざし
新あつり母もしく共の命はふき半ともえんぐらちん
とらひたたり見えれどもさきまごら母の本とつぶかしく
あひふとえと因て物とよきそあはれさあけよと入り
かして窓のくもを物くりせくはあひま向ちくはれし
妻の簾の内は居るすたはるいふの本とつひひんとはあはれと
よき下り下りまらりあらくともさびらう妻にいまうくく
兄とつりてこれなりちひつらせともやま妻物よらひく
くともはち命をさして取とぬ取見え方とつらひぬいられよ
取ぬよ半もわくつらぬれどもせんあし弟下りるをそはれし
見と下りあて頭あつとふ切れとり下りてゆくとそ妻が方
とえんうてられやとふ教とこればまが物とらひ鬼の教
なりたけはさうに共ぬらうのそはれは妻はほげりて家因の
老ども位るちちども甲斐あつてやまらうとめんはははは

十一 東國人値鬼語

今いじり東國よりのはつらう人替田務とぼりてありしが
日言ければ人の家とつりてやとんとすふ共きよ今後ぬ
えりる家ありちより下りて爰は宿す候者も下りるふ馬
をどつあてておつらひ上れる下りはと敷く所とつらふ
おつらうはよつらうなる終極のわうあつ物人よとぬよ
さあくとつらふとあはれは是もも一鬼やとのておわ
あらん老よとげくゆるは返こもまれんきをけりけり
げんとそひて馬どもはんんといひく就くひさうふち終極を
てらうのり教とつりてまらうとれ終極の蓋はえらといひ
ておそらうげあつとあげ甲のまといはくまでおんとす
然らうもかたはあつとつらふよびらう馬城地とまげ
るあえんよはれればその折はえぬとぬとさなるよといひ
せよこれとつらうとあつらうかまげ一が替田務とつらう

土俵合さともおぼえまじりな馬よりたうてるとば捨て枱の下
比西の枱のりしうくえれてさぬりなうら鬼母うて枱は
てすまぬとまきとあげて何待しと夜くうびれ枱の
下より根とあさそてなる老あううらば何ともしく枱の
ふの鬼がいと旅の累はそそでせまりしがあまううらに
しとゆふ枱の下なる鬼あううやうらなまはねははれとそ
うの男とはみみあううらにうらひうら男が家人とそと
あうらうらうらとそとそとん旅ゆより肝とけしとげきり
りんかううらうらとそと

三 産婦行南山科 值見逃始

まじりあまはのあまあう 父母親おあううらとそ
るまあううと懐妊しとれと使のふとそと科とてひうらふ
か帯と果しと深き山もくもく木下とそと産まぐとそと
るひうらうらうら月満く産んて氣あじうら雲白山の方小約

てそとそとあとそとそとそと山科のふとそと山家のやうふつうら
あううらうらやれれとそと産のふとぬぬ折あれが家とそと
てあひうらうらとそととそとと垣と越て入ぬ折ゆら板敷
のあうらうらやとそととそと奥の方より白髪のお婆あううら
とそとひうらうらとそととそととそと女育のまふとそとと
嬭いとあれりうら年れ家とそと老いあううらとそとと内とそと
バカうらとそととそととそととそととそととそととそとと
そととそととそととそととそととそととそととそととそとと
思ふとゆらあうらとそととそととそととそととそととそとと
そととそととそととそととそととそととそととそととそとと
そととそととそととそととそととそととそととそととそとと
かひとそととそととそととそととそととそととそととそとと
まじりあううらとそととそととそととそととそととそとと
ひうらうらうらとそととそととそととそととそととそとと

多岐にわたる風をたもつてその声よく是にたててとて子興
思の身よりとらるるあつり季武をそとにたててはせんとして神の宗
を瓜うけしうぬまづくあれが母のついでにそまよふて多岐と
し季武をよくを命ぐとして何よりあはれこの名よとては
まづくしうりあはれかゝるにこれ居る人の子孫の者始末の
私をばて保ももたらしてはるる死にあらうとてあつひを
アらり季武を離し居るあはれは是をまよふといつてはるぬ
うこそ季武馬より下内よ入るあつひをひらき老もまよひて
かたぐれいれはつらうよゆにて始末の島の子とて是れをぞ
あれえあるとて右の神をひらいたはれは母の業ありて有るか
のうれく聞ける人の者もつらうはれをねとらるふぬとの
ゆでいをとりてはれはう約束のかけ物とねかして季武を
つらうはれは季武をひらいてつひはるはかたぐあつひをひらふ
らうくつらうとらりなりうくづらうはれはのあつぬとのやあつらうと

季武をよめにするくしうり人たつて人らとあり

西正親を父兄に教束詰

今むし一正親を父とし老あり若しとある所のえつら母の母よ
通ひらうかありはれが汗よゆはくあつひをくしひはれはがいと
いあしは田舎人まきまきとせうめははらまきまきとせう
是より西の方よ人もなだ堂ありそれおれはまきまきとせう
して西の方一正親の件の意よつらぬ母堂のたんとひら
あつひはれはより一正親を父とせうめははらまきまきとせう
のこら堂の境は方より大の志うつらうとらうとらう人あつひ
こはまきまきとせう母堂を離れたとせう母の志をす人ら
ようらられとせうり女房母とせうはれははらまきまきとせう
が正親の半ありはれははらまきまきとせうとせうとせうはら
家まきまきとせうり人の母う宿するとせうとせうとせう

山ノ入るうい子のどもはら老あぶらひてゆうり来
 内ノきろ男々家ノ人ノひきひき病正しく二言
 夕て死しうこれとりつてゆいまの物ハ津まで
 王ややんい物也に國あううふふありとざり
 はえいとうあり

今昔物語十二

今昔物語部十四目録

- 一 鬼現○怪異傳油瓶形殺人語
- 二 近江國女生靈來京害人語
- 三 河原院化物殺人語
- 四 鬼現板殺人語
- 五 近江國輕與野戰語
- 六 常澄守永於不破關夢妻語
- 七 紀遠助值女靈被殺語
- 八 七妻靈值舊丈夫語
- 九 亡夫來值妻語
- 十 鎮西人至度羅馬語
- 十一 播磨國鬼未人家被射語
- 十二 近江國栗本郡大排語

- 三 白井君銀提入井被取語 あつきのゆか
- 四 近衛舎人於常陸國依歌失命語
- 五 於京極殿有詠古歌音語
- 六 雅通中將家在同形乳母二人語
- 十七 散米退鬼語
- 十八 堀河空宅牧恠語
- 十九 民部太輔賴清婢女逢牧恠語
- 二十 西京人見應天門上光物語

今昔物語 体部 十四

○恠異傳

一 鬼現油瓶形殺人語

今むう小師宮大臣源實資と申り人内はあつて出る
とて大臣とてふりおたうとちるふ車のおふ小さ油瓶おとす
ゆけはまばたけあやとあるゆれこれいどの乳母とてふを
とれがけけつよ大臣よす西よ有る人の門の閉るあり
不ろく油瓶溢の穴乃あるよりいんくとおどりらるがあ
まてなすくとぬれとてあがりて溢乃穴より入るる大臣
かくんそく帰れひて好人よとてくちつら家よめて何事
うあつ同てこれとてゆらなれとて使とてかくる来てい
うの家よりわらむすあ作らるる日ごろもつひては晝うせ
作ぬといひ口とて大臣有る油瓶の物乳とて有るが溢
の穴より入てあつとちるなりとてを尋らる他の目な

及ぶざり先づも不慮ぞうりいそれと見りひんいたぐ人よは
たそせざりうらとあんころ侍へしとあり

二 近江國女生霊来京害人語

今いむう一京より英徳尾張へ下る下船あり京と東ぬく
をそ約らよト^{ついで}そ青色なる衣着る女きて居たりが男
むみてづくにいさする人ぞと問ハ男英徳尾張のこゝはう下る
なりとそふさいとそいひと急る人よ尋るいひをれ
とせばきよは民社ま某とそ人の家を知るふよとそいひ男そ
の家は是より七八軒あり旅立かかれが^かこゝとそいひ女
のうよ果てそとそとのぞみ一は男是れそ女はそいひて
其家よゆたそそそ其人の家あれそ女いそだて約合
わざとあれまどたうほけのりそそそそそ近江
ふまそ何とそ老のむすめなり東のこたかそそそ近江
うねるおとづもりといひこかきけんやうそ其ぬ男見てあ

や此本あり門閉らふづこより入るぞとそいひて
まねちふしの内そそふそそそあれのこそおありいおるるり
とゆびの死そそ乳そひなり希有のゆれとありひて
ああければそ家の内小知り老ありしげおよそそそ金そそ
が家よ何るゆおそそと問がその老いそそ近江よそそそそ
の生果よあやほされてい敵そそそつづひひひひひひひひ
せ果あつれそそそそありそそそそそそそそそそそそそそ
かち紙同て女いそそそいひおそそそそそそそそそそそそ
そそゆくて其日は家よりうてそ日ぞうりかそそそそそ
りかの女が教へそ色紙をそそそ其の家よ尋りよりて人を
りつて志うそそいひ入れそそそ対面そそそ夜のみ
ぞそハソのそよゆれんといひて物をそそそそそそそそそ
そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ

て教しんんるいあんけはくちんち

三 河原院化物教母始

今むらう東の方より宗尊尋てかえんとしてひて京のなり
らる事ありけれも妻もひつんであれが京とせんてまよ果
てらるらる宿所遠くありけれが河原院のふちに行か
よまちりの老ふくまで暮らよりて宿しるる夕暮方は
乃がほ居るらるらるらのこの妻と内よりれひして妻
ときて別へたり夫おどらきとせんとしてれどもれをいり
後戸と開たるとありんとすれはひら老の男ととありは人の家
よめてきりくは半あり多きけりてさふらば教十人あり
来て銚ともつくと戸を切ひききたとてとてんふらの妻か
も無なもなく死に床い俾よらるらるてきりはと骨ほむら
残て肉いかりもさるらるらる鬼の教しんんたるありと今
ま合らる事いしりひくその男もはかくたのがむらび

ケりいしんあんけはくちんち

四 鬼現板教人語

今むらう或人の許のつらき侍式人あり北南西の放しんの
向は宿直しんと式人もふと闘たたかる事なりをひは帯て不しん寢て
物懐まどもさるらるらるの友よを得けり長侍の法司と一五
位よりてさるらるらる上宿直よ出居よひらり所しんらり
も夏のはきあつてさきえつたよ奴もよみらる式人の侍しん
やぶらて居るらは夜深さう夜よ東乃まの棟むらおふ微しん
板のさうぞらりけれが式人は老どもんぬ集れといへとい
板七八尺の板とえさうはひらりて二人のほりとい
ゆく二人の侍さう鬼ありやうしんれくきりぬきさう居れ
ゆくは事しんひて満子の迫しん乃かりあるてまは板しんれく
入ぬいれは居る方は祈しんらる五位侍物よれれらるらる二
に交うめらてとともあけけれ二人の侍しんどらうまは

人どたうてとろくれば半あつたほげれが人死て大とこ
りて考てとろよ其五位侍志平よひびぎてたつり板がへ
出たつてぬも肉もつりつりえとろくば胃らん
よのハきりつてあひが力よ具まてつてのなりとぞしひあて
まてあんころはとちり也

五 近江國鯉與鰐狀語

今昔述に志賀郡体名類聚 鉤作滋賀古市郷の東南ふ見瀬こつたせといふ
ア川の南のきよ勢多河ありて河の流よ大海の鰐うなぎうては
鯉こいしきくふは鰐うなぎ負てうつ下つて山背國ふそあつてたつ
鯉こいし勝てははよくつてく竹せ橋とあつて今にあつてふ
ふ見の瀬といふ勢多河字減スの流ありとあん語はとちりあり

六 常澄安永於不破関夢專語

とくまう常澄安永常澄姓 未考といふ老ありあれハ惟孝親王
孝當 作書乃下家司なり其官の封を徴じがあつて上野國ふ

ゆてうりつが及法園不破関は宿して寢たりしよ其夜の
後よ京のうらわ火狐たぬきたつてなる老ありき其とれ一人
れ童女と具つてうりつとらえれば女專有りこいあやと
ふふ向隣家よ入ぬ安永壁の穴よりのぞれて見れば昔我
妻となりむは古く橋ととりも飯を炊てまふ合し程をく
寢たり安永大いりもあ相ハ女專うれが上野のゆけつ流
まてのきみまういりつとらえひて隣家ふけ入と
あつてとらえあつてうりつとらえひあつたりとあひあつたり京にい
あつてとらえあつてうりつとらえひあつたりとあひあつたり京にい
て夜とつてと京ふつて家よつてふ妻恙あるやつか
安永とつてうりつとらえひあつたりとあひあつたり京にい
ぬ事耳とて我といひあつてとらえあつたりとあひあつたり京にい
内よ入飯と炊てとらえひあつて二人外に居よそのふとらえ
アつてとらえあつてうりつとらえひあつたりとあひあつたり京にい

てかく帰れりたりとよろこびてゆく安水我も志うくの夜と
見てんもよきりしりいばぬ書にきて事しこころは妻も
同てあやしく思ひたり夫妻とのふかく同内よ同夢と見
りうも希有の本ありとあんなるはさえりたり也

七 紀遠助値女靈被殺若

今ひびく長門前司藤原孝^{下総守貞孝三男}とひ去下総
権守といひり内関白殿よ作く美徳園生津^{あまのつゆ}津庄を創り
知らるる其津庄の紀遠助^{助當作輔系圖曰遠}といふ者あり孝
範^{輔右兵衛尉清輔男}を助とよふ系殿乃を宿止小免一上せり宿止松より
色^{あざ}バいとほらうきそはうりたり美徳園をりて幾多後紙
つらよ一人の女裾^{すそ}きてきそりしが遠助と見てしづちおひする人
ぞと向美徳園うらん人ありと答ふ女もつらば殺すすべし半
あり向るるんうといひたり遠助何をもおとばておろしを
中^{ちゆう}こんといふ女うれしくのるひよりと懐より小箱紙

何とくはくちと出く方縣郡唐郷^{按和名鉅唐郷}乃摺
のもしよゆれ終り摺の酒のはめふ女房おそんははりり
ふを助をとうちとて其摺のりふおそん乃其房をばねと
尋中ぶきやといふ摺のりふおそん乃其女房をけりり
事^{こと}つそそのははりりははりりやいおあけて見るふ
り^りとやういふ女がさうも声を助が耳聞よりるのこよと
家人あておどりりりそのらを助馬よきておねふ美徳
園にけれども其摺のりふおそん乃其房をけりりははりり
とおひてとてきんそと靈をきてるおの物のおふさげてきん
を助が妻の嫉妬をれりりものおれははりりおそん乃其房
がまよゆきせんといふ事よりつらば買きてりれよとてさうふ
こ^こをそそをわがせらる向ふ摺といひておねはん乃眼精と男根
を多くたり妻よおどりりきそを助が帰るとおねはん乃其房
助えれがく足向れ物と不便なりつらばとて蓋とおひ

ひてりしものやふ^い織^いくうの女^いのち^い一^い柄^いののふ^いおめて^いは^いけ
ば^い案^いのど^いく^い女^い房^い母^いし^いは^い案^いと^いは^いく^いと^いか^いび^いく^い半^いと^いう^いれ^いが^いか
房^い案^いと^い案^いと^いう^いと^い此^い案^いの^いあ^いけ^いて^いる^いれ^いは^いり^いと^いい^いふ^いを^い物^いに^いふ
あ^いり^い半^い作^いび^いと^いい^いと^いも^い女^い房^いの^い乳^い文^いと^いあ^いら^いば^いて^いい^いと^いあ^いく
あ^いら^いふ^いれ^いと^いい^いつ^いて^い身^いを^い物^い家^いに^い帰^いす^いと^いい^い北^い門^いの^いす^いて
あ^いら^いる^いを^い妻^いと^い向^いく^いと^いう^いづ^いら^いひ^いく^いづ^いら^いひ^いく^いと^いい^いれ^いと^いは^いら
に^いし^い改^いめ^い然^いに^い此^いら^いあ^いら^いと^いい^いひ^いて^いむ^いれ^いと^いあ^いら^いる^い妻^いが^い嫉^い妬^いよ^いら
て^い遂^い物^い北^い門^いの^い命^いと^い失^いひ^いて^いい^いかん^い強^いう^いつ^いと^いい^いら^いる^いと^いあ^いり

八 也妻靈值舊夫妻語

今^いい^いむ^いく^い一^い案^いあり^いけ^いら^いは^い身^いま^いづ^いく^いて^い皆^いは^いく^いか^いも^いな^いり^いし^いが
知^いら^いん^いあ^いら^いま^いの^い守^いに^いあ^いら^いて^いな^いら^いれ^いと^いい^いま^いま^いぞ^いん^いと^いま^いら^いが
これ^いま^いぞ^い具^いく^いと^いら^いる^い妻^いは^いあ^いく^いて^いら^いん^いを^いえ^いも^いた^いう^いと^いら^いし^いち
ども^いま^いづ^いく^いこの^いあ^いま^いり^いま^いれ^いと^いま^いく^いた^いら^いり^いあ^いら^いは^いの^いむ^いす^いめ^いと^い案^い
ア^いそ^いと^いれ^いと^い相^い具^いく^いと^い國^いふ^いぞ^いら^いら^いう^いか^いて^い月^い日^いは^いら^いま^いま^いと^いど^いん

て^い案^いに^い行^いて^いな^いり^いに^いも^いの^い妻^いが^いら^いう^いな^いく^い意^いら^いく^いて^いま^いら^いふ
兄^いま^いな^いく^いと^いあ^いら^いく^いれ^いが^い疾^いの^いゆ^いり^いて^いれ^いと^いを^いぞ^いや^いう^いよ^いと^いて^いら
あ^いら^いん^いと^いめ^いと^いま^いぞ^いく^いな^いり^いし^いう^いづ^いら^いば^いら^いす^いと^いい^いと^いい^いら^いれ
又^い月^い日^いも^いと^いて^い任^いせ^いら^いう^いぬ^いれ^いが^い守^いの^い供^いと^いて^いあ^いら^いら^いう^いお^いこ
こ^いと^いひ^いら^いら^い私^いう^いあ^いく^いり^いの^い妻^いは^いま^いま^いら^いう^い京^いふ^いら^いう^いの^いあ^いら^いハ
や^いぞ^いく^いて^いま^いあ^いん^いと^いま^いひ^いて^いら^いる^いや^いお^いを^い取^いと^いな^いの^い妻^いと^いい^い家^いま^いや
ア^いそ^いと^いの^い力^いは^い旅^い將^い案^いの^いま^いま^いと^い舊^い妻^いが^いり^いと^いふ^いれ^いぬ^い家^いの^い門
に^い閉^いれ^いが^い遠^い入^いて^いら^いる^いま^いあり^いし^いふ^いか^いら^いう^いて^い家^いも^いあ^いら^いく^いあ^いれ^いて^い人
信^いら^いる^い事^いも^いな^いし^い是^いと^いら^いう^いい^いあ^いく^い地^いも^いれ^いん^いむ^いら^いる^いの^いち
に^いう^いか^いは^い五^い月^い中^いの^い十^い日^いに^い半^いあ^いれ^いが^い月^いも^いあ^いら^いく^い東^いひ^いを^いふ
ふ^いぞ^いく^いに^いは^いら^いう^い家^いの^い内^いへ^いく^い見^いれ^いが^い常^いに^いた^いら^いし^いて^いふ^い妻^いひ
と^いり^い居^いく^い又^い人^いか^いく^い東^い界^いは^いら^いく^いと^いう^いみ^いら^い氣^いを^いも^いら^いく^いう
れ^いけ^いら^いく^いは^い何^いと^いて^いれ^いう^いは^いら^いく^いと^いう^いあ^いら^いひ^いら^いぞ^いと^いい
一^いの^い四^い月^いま^いく^い半^いは^いら^いひ^いつ^いら^い半^いど^いり^いと^いい^いて^い今^いら^いか^いと^いす^いむ^いじ

よの氣をいふくあはれよのひらうまゆくちく事うてまのたより
ら名節のわふふ寄身て実あけよのふ尊むうのまの勢
あればあやしくあはれよのたをうくして静れよをんるのぞれあ
まをく思ひあき一途まをくまをくあきくくくふ

そぞれお紙わく人のそろれさかみひくさく人よあてぬ成り
やひひてまをりしが身より燃のまを先が母れをうして相
いとざりしは思ひあきくちりありうてまをあをれたいあ
成りてまをりまをらふかくたぢりくまをうりくうり日よ
二夜もゆり若返うらうありとひひてうれ消えうにうせ
まうりまをりまをりまをりまをり

十 鎮西人至度羅羅鵠語

今いむし結あは信りう人高りあは教人船一被ふ家て
法よひてか國よ帰らうま法あのみ申はあはあてら
あの澳よスガの島あり人すあは新るれが船中たあはまはあは

漕むくく金物のいへあみせんそ船とよをてゆふうえあ
がうくまの人の耳ふ音にあやしくひて又船ふ家てこれ
をうらうまのうらう思ひまの島物まに白き水干袴
たが百解人をうり出来う船の志まは船まにころこれ
せんうて船とまを去返えく此ものども海まらうあはれ
船中た者らうてうらう茶あ共板を具へてこれらにあを
ほひて何志まのながく世まはあらうぞゆくよは船中
ばい志まのうらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
少の帰入よりう船の者らこれとれと漕むくくぬは物ま
帰て後た平と人あうらう一茶むら志まのうらまのうら
ゆりまをり船中人まをて人と食するありり東内ま
はしてまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをり
人の中ふてあうく人よ似てまをりまをりまをりまをり
今まをりまをりまをりまをりまをりまをりまをり

寄る百午のら空ありと破ふうつれなば丸をたてらる
あやとぞかたりしつは半の法西の人来よあがりうらな
りく瓜園つぎくうらけつるも也

二 播磨國鬼来人家被射詰

今心う播磨國に住く人の家よあやたるとは
陰陽作とくひくうらむしうふ何の日鬼来とて
つくこれとれい何よりあつとて同は門より
あつと物た乃れとてとて地ふと切さたて法と
何そそまあそとふ所不物の用よりのでけは
藍指の水干袴とて鬼来とて
とてこの家園の老れをばさるうけり此化物
いはくとて鬼の来とて家とてをみて
つまがふふとてせんよう一射射く飛ん
とてひて物びより大の石候とらふつ
びてりあてとて鬼が胸板あさ
あさきとてとてとてぬ鬼射れてくは消やう
はれを
ていあ半とて守家別半とてあは
とてあん作はく

三 近江國栗本郡大柵詰

今心う近江國栗本郡大柵あり其園五百尋
あり本の方とてねのそびとれとて
そのうけ羽とて丹波國とて
あひは伊勢國とて霹靂とて
う守大風とてきとてまはるる
間其園の志賀栗本甲賀
三郡の百姓この本の落とるや
日あてとてるゆは田畠とて
つく
ていあ半とてこれとて
其郡の百姓等とてふは
とて養
す天皇別掃守宿禰とては
りとる百姓がやふとて
ふ
てけ樹とてはとて
この本とては百姓田畠とて
つる
と豊饒とてはとて
百姓が子孫今とて
其郡
とてあり
ひとて
あつとて
口とて希有の本也
とてん
とて
とて

十三 白井君銀授入井被取給

今昔白井君より信日どのなる迄至洞院は位一が
後なる鳥丸より東六角より北鳥丸面六角堂のうらあ
るを、信日君其房より丹と撥りりる銀の銃と伝出り白
井君より二びて別の銀とくらべて、小エ授ふるせて指しり
より、小此借が起し、其由信守藤原良貞といふ者のむす
めども白井が房小事りりる、其うしたるは銀授と井
鞘すそて水と汲りりる取らづしと捉と丹ふれしれな
りり白井君も是れ其い人といひて取とよとて丹をわして
足すふあじなまづしとてやまを人集めて水と汲るを
先にも地よりあがりりりるあまよもとの銃のまのすのとせなる
しとをためておそくしれたる、かたりはてしとせ

十四 近衛今人於常陸國依守失命給

今むしり、近衛今人ありやれりくしむり、或時相掛は
まそ系はよとるりりり、陸奥より赤松(城)系山を焼山(城)とて
山ありけ山と通るとて馬賊としてまびりるを、はと
泥障と拍子ふらして常陸弁と二之通りしひり、対深山の
奥よりあがりけり、彼りてあがり、やしてひて、
こころらけれ、此男はどらき、馬賊をしめて、是れは
がしひつるぞと、彼老どもに尋ねども、きかづしひつるぞと、きか
ずしひつるは、此の毛とらして、おそく、なごり、さより、かく
て、寄り、まき、好ららあり、く、ぬ、その夜宿りて、寢、死
き、り、た、信、弁、其、困、ま、り、ま、ひ、り、バ、困、の、神、の、め、で、ぬ
ひ、り、ま、め、こ、が、ら、ん、こ、れ、と、か、り、は、ま、り、也

十五 於京極教有跡古寺音諸

今むしり、上東門院藤原道長京極教の位りひり、時二月に
日あまり、南面乃極えれ、げ、ま、れ、ん、れ、ん、に、院、は、靈、祭
なり、神、ル、ラ、又、南面の日隈乃間の不ども、氣貴く神をひ

のりやびわたり乳母をわしと名ひあぐるおまたのまを
ついで扱へけりふよのつら老どもとて教てせりりらま
此の母とよ血つとらりし乳を児どもにあたりよふあ
おまたとをとりたりとめんは侍へりし也

七、堀河室宅妖怪語

今むしう宰相之者清行 性氏録曰三善宿祢百と云人あやあ

のりを知り陸湯の方ともふらあらり志るるよ五條堀河の

まよま志るる舊家ありあべした半ありとて人今あらずと久

そくたりらるる清行の家なり乳母を買きて後アケルふあり

奥の方びんふ流るる清乳りる女居りり麝香のふあひ

えぬぬかびり赤色の麻とらりりじりりよより出るる類つと

白く類の捨りりり眼尻長くけりりり瓦目ふんやりたる王

づりりり乳貴しあらめもせむ守りあられ居りりるると

て麻とをそれどに耳ワささぞきれて寸さるりの銀のどくろ

牙ぐひらぐひらあや次去れとるる後ふ海を毫も入て麻と困ぬ

宰相これもさるるすしとおろるる者ぬの月さめてあられよま

晴き方より浅黄と下居りる箱の文挿ふ文とらりて目の上

よさげひらみて捨のりり宰相とひびるづき居りりそのこ

れ宰相をあげて何半と半ぞあられ居る居りてふき妙

まそさるる年更に居る居るか居りめははた大なる歌とふひ

て無んやんあふ事と居りよそのと宰相のいりゆがうれ

ぬ不者なり其故ハ人の赤紙ぬ半ハ染半よゆてゆ半を

己身のはさるる居るさる人とれらりりりりりりりりりりり

ぬずる事非なりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

ぶる人ぬりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

一つたあらば居りりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

くばりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

つりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

ううとすくそれどもづちのえ失くけりかく
 ておの糸のあふまきこころに帰つてさるがまじ
 とおのひりうのやねのうづらひて然しとをさ
 りはるるも也

今昔物語十四

今昔物語部十五目錄

- 一 加賀國の人渡捕鴈助大蛇討異形語
- 二 播磨國印南野牧怪語
- 三 以人為馬語
- 四 佐渡國人為風被吹寄不知鴈語
- 五 能登國鬼穴夜屋鴈語
- 六 習外法男語
- 七 批為女童氣馬語
- 八 過鈴鹿山人宿不知堂語
- 九 越後國被射寄小舟語
- 十 批化杉本被射教語
- 十一 飛驒國男退治邪神語

今昔物語 傳部十五

○怪異傳

一 加賀國人波瀬鶴助大抱討撰松語

今昔加賀國に在りける者七人常海にお釣と好と業
とと年月以て行りたるのころ八海賊のおそれありしが
巧策兵杖と申すりりるありしが七人一船よきて沖よ
漕かしけりありふとふと風吹おていざくとも知れぬれ
ゆり程よとさしけり行りしやとていざぬまづきづりとの余
いざぬまづりしとていざぬまづりしとていざぬまづりしと
新とめがうとていざぬまづりしとていざぬまづりしと
りざぬまづりしとていざぬまづりしとていざぬまづりしと
らざぬまづりしとていざぬまづりしとていざぬまづりしと
アしふるひかけざり風よとていざぬまづりしとていざぬまづりしと
スつけてよりさびるがうとていざぬまづりしとていざぬまづりしと

二風我ちをせつる也れぞ剣りあるん共物おれとこま
アつる方よむのくよづれが家人へんて長植
云行ひ身酒瓶をとおもれ横とひつたるとえ
をぬめ乃金物あり取せとくうむらよ物今も後日
ぬれば皆よくひて酒のこて残る物とバ明日の料
長植を入りかたりにきぬ行ら若もはぬきぬその
ちまお胃ぬくよりあ今日共世と定はるゆハ足
より澳の方へ信有と信のまねと殺して此信を以て
とくはさよまく殺して牧羊なり响りきて殺す
死ぞぞがひよせ死と死してあれ昔かたのよひて
かどくと世にはありとくあ物人といくもよまぞ
がら半ひれとくまあり六合派推してや作よとく
のうらうくも共敵といふをうりの軍兵派具して船何船
るうらうくや母り作やとくは信をて信ひ敵も我も人の難

あぶりのえきとく殺すくゆありん共物おれとこま
耳ぞく殺我の自とくたどく共世も同派は合すて一尉
よ余のあらんごうり射と腸とて己の所よりお債して午
時降と殺すてとあどのゆ奥の方よ入取物人た十兵上
アとく耳派代とく菴とてとく遊とよく遊らの弦をひき
そ敵とて瓜焼物治をてとあ終と己射よあんてう歌の
事んととあて瓜をとりとれバ風とくよ次おと海の面
アとくやうとあてとてとくをとりとく見ありあてとく
やうとてとてと中より大なり大二つとみれり又我れと
瓜をとりとれバおのくはあそとくゆと若もあびとて
さうとてと中より又大二つとみれり又澳の方より耳を
瓜とれバ焼物とて又汗とらとれ 事れり二つはとて
そを雙眼なりとよりとり物瓜とれバ又とてとの大蛇なり
二つの大とてとて定も雙眼なり相違なくきかひは

常光とて子孫の風をくわはれぬ所なきも子孫の者ども且
てとくハをばくと家もおつるをせきく金物成たうて七
首許ありしと物の方より風吹せて元バウとて席を能電
團王志にけりね魂取のりしにやあうはうりし其為は人
の家を多く作らるるに事ばやうとて密とてさうり人の
ちよ本取ありきとぞいふ名也耳もとてくも耳を唐人
とまづ其為とよむとく金物成まうち艷愛をどとく
と為より教かしくせりとせんがうけいさし也

二 播磨國印南郡奴牒諸

今ハじり西國より飛脚とて男あり其成りつごてと
つらふ播磨國中白地ふとて日なれば宿すごて東
かたきとて山宿の成のふとて庵のちかたけく今然ぞり
をまふとくあふとて遠入ててすも居たり夜ふた
程よあふとていれあふとて今成あつた念仰とて耳

中男あつとて耳の方とて名なりればあやのふとて
つれて信でも打中やとて念のと唱へて耳の舞送なりと
又此指くあはれい男が居る庵より二旅をり去て死人の
控と物もて舞送を継ゆり下をとも多し来て墓成
染してとふ卒都染とてまく考へてぬ男をわらふ
墓乃方以えやうとれば此墓とてねよる也僻同とて
てよくとればとてさうりよとてはて去らうとてほとちり共つ
とて何れもけりしとてとてひあご庵とてしるひとて耳しる
とて男あひつら舞送の所は是鬼あり其鬼の我とて
らりんとして耳のにこそは庵をせとてけとてはれそはれに
とて男の心もさうとて刀取扱ひらして物もて鬼見しとて庵
とてんとてとれとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとて男あつとてとてとてとてとてとてとてとて
けりしとてとて人里のちんちんとてとてとてとてとてとてとて

まう形く来たぬ申し其郷の人よあひてまうくお奉り
とゆは其郷の人ぞめてえんとて男とてたゝまをくゆるふ
おお葬送でしあを養ひ奉り兼はあつゝて大なる
程と切らるて奉りけ程の男が産し其はねてれ
どんとしてまきれらるとのあつんとて信つてふらる也

三 以人為馬語

今むうい仲道とれたるふ傍人四圍とあがりくるを
のみゆひて深きまをくしるふはまはらりて人家
まのうらぬ恨びて其家のまきあて物やア人のハ屋の
内よりきそと阿呆ハ仲道はる者共のたをぬて遠て系
もくたれと教りかるとしあつ内より奉り信にそへ給
てまはるも小根おのとし解のちせ級もどくらせと後手
はあはけはあやげりや信解ありしは例の物りら馬は
とてまをく響かぬはとてその傍例の物りやまのつに

一人の傍の者と教およりをまのつあつて其あつて四年
おてつあせまはらちち他は馬とゆへ身ぶらひてまを
繋とてあつてひきまをくつりて二人の傍の者まをんとし
どもそれなほれしは度と又一人とをまをくつてまを
今人の傍の者も其を奉りてめをけりてまを小念
にまは仲のつか後手とやまはらこの傍其傍の者とま
先人のまにまをく扱きとつひてあつてまはらは仲と併て
うしろは四水あるやえよとまはら仲の者も仲の者も
りかハ房よりまをくまをくまをくまをくまをくまをく
のまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをく
はまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをく
あつてまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをく
奉りてまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをく
かへてまをくまをくまをくまをくまをくまをくまをく

まづこれ共おきつる所房の太ひすありそより下よ
スグうが妹をえりうれぬきのもちまけやど一足より
ぞとてそ人れをいませ海息と事せんといひてまきてさ
せていそ二人の徳の者と馬ありてそいぬばまよが
めくこちえんとするあり田水やあつてそやるは院と
ひんがざあありさういそいそいそいそいそいそいそ
らちちやせむいそいそいそいそいそいそいそいそ
方中町ぞり約バ山のこりいそいそいそいそいそいそ
よびせしけ文をいそいそいそいそいそいそいそいそ
これ入あつていそいそいそいそいそいそいそいそ
がくあつていそいそいそいそいそいそいそいそ
志記事ありいそいそいそいそいそいそいそいそ
まういそいそいそいそいそいそいそいそいそ
れそらいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

ねどもいそいそいそいそいそいそいそいそいそ
うのうそいそいそいそいそいそいそいそいそ
て後女房約きたるいそいそいそいそいそいそ
人なうそいそいそいそいそいそいそいそいそ
ねと教のまよゆいそいそいそいそいそいそいそ
うんそいそいそいそいそいそいそいそいそ
ねく人あつていそいそいそいそいそいそいそ
いそいそいそいそいそいそいそいそいそ
いそいそいそいそいそいそいそいそいそ
いそいそいそいそいそいそいそいそいそ
いそいそいそいそいそいそいそいそいそ
いそいそいそいそいそいそいそいそいそ

四 依後國人を風波吹き不為馬語

今ハ七ツ依後國の者ありて一船に坐して海をいそいそ
中とていそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いぼぞしとひて船と川上多風し海をてり船一つのは
まきとらうらなきし船より人ぬきたり男もあはれきま
もあはれ顔と白き船次りてはくさたり長きいびきさ
くまらうげ成るうらふと成るをあらういふある人の穿耳
れりぞと河原の人をくいぢる人後回れ人ありが俄と悲
風と煙てふひにけははるくあたりとふゆの人とくあ
徳一のちり半なれのがりあはきまらあらん合衆をぞと
あふ平とひて入ぬづりかて回どやうぬり大男十人を
けり来とらう船の人どもえとえてそい鬼とこそあらめ
祭を體とらうく其方量とひやれういふいせんてたて
ぬきとくゆの者ども穿来て穿とらびあはれとまらそは
わら知と半ちんばあうこれとくひてまげあはらあつ
く風多ぬりけりそけりか回し仰ゆづりともひて不効
ともとのと半成ぬゆきてうむ不効ともとのと半成ぬ

よりハきいめて大なり此船とてけ二名と合衆とてさう
なりとぞいひたりはるくそふく思ふあはれとて神をぞ
あやぢけんといひていふと回どりりれぞ長の方れハ
いづりりり此半ハと進き半ありは後公とてなる者
考りしとらけり法りてとらとら

五 船とて鬼宿屋の始

今昔社登園の奥に鬼宿屋といふあり其船は河原の
石のやうな鮑かほくあれが其船とて光浦といふ浦とあり其
浦とす七海人の鬼宿屋といふとて鮑とてて園司小年
前より光浦より鬼宿屋ハ竹程一日一夜ありを
くぬた捕りといふあり鬼宿屋より捕りは一日夜の
法海ありとれども捕りハ人わらうらあり光浦の海人
鬼宿屋よりけりて仰りぬれハ鮑一万と園司小年より四
千人一度といひし其鮑のむらとてぬらひやうとて

ふ藤原通宗朝長徳し守り任ねる年光浦乃海合
の鬼渡屋一信り仰て國司小範并ひらぬあてせあ
けが海合のびく城はふ小信はれ光浦人なりけり
鬼渡屋よりうて範取し徳くうく一府にせあてり
あむし一つをうけし一つとせえりあむし一つと
かんたし一つとせ

六 習外法男語

今昔京の外法とゆくつとす下衣は御方陣とら
方男此る事ありんといひれは御方陣とら
今昔京の事ありんといひれは御方陣とら
つとす下衣は御方陣とら
くせしは御方陣とら
あり男にうし長きうた信の方とげありあり信實小

とほし人信んもぬ男作しんはれとてくし中世徳の
色し一序れは之信共男のゆとろふ口内一方がとれと
し若信ありて男がすろをうかえしすんひそふと
こかり口取換てれうはとれた老信よりとぬそのとれ
又れば信ありあうくといひくえあうとてはりくま
えぬるなり堂の内あり尊うやの信は御方陣とら
らふありつとろれとてあたまふんをまづめえはは
ろろふ再しとていふも一條と西洞院とありはり大
神といふ寺ふ再しつとろかりか外法のふしぎなるを
用くつとろはりつとろ也

七 批為女寺いづま馬指

今昔はむらあふ京路門の道に夕暮をたぬれば
とろろとてあふありあふありあふありあふあり
このせぬは四つありつとろ馬より神かみありて批ひあり

ゆふ一人あふ去かき 希川のそ馬より下で埃をたてたふ
ついで後のどきまにせんらう此方へ流る侍てひん丸箱
くまふ人そち死んぞやあらうふ抄るなりう瓜後松の
大よりつてもと様々々 養育とりつてなぐ射て今より
うねつごかせそとひてさるたふそちあち死ばえあま
うり死んぞも術述て去くうういふ死んぞ此就はおえさう
流るる御死ふゆううい半ども成らうくがうううせ
がんとらうつてうううう

ハ 過鈴麻山人宿不堂 結
今むしう伊勢田より追に因に紙るらうらぬ男三人あり
流麻の瓜のうふその中へ鬼の位とひて人の客をぬ舊
堂あり故之人の男よりまてあひて地蔵ふ今定は鬼の位と
用い定て批程なる下をとりて抄るふ二人の男がい
う書面つじし中へ死しうら男あり其死教を承え

やうソバ二人の者ぞあぐ耳てえす下とそとさうふりせ
然れぬ今一人の男も又裸とあてさたよめらうて死人をたて
定て其死よひてゆゆらう本男耳て死人のうらふ外と
る男以負んしするは負んる男負んる男の腹と志とく
ひんがぶ死か死人とひて捨負てうりて堂の戸は許はか
げ捨て約束のぶとく定し負て耳らうとひん堂の内ふ
今ら向ふ負んる男は少げきうらうらうて堂より出てこ
とば死人か一早く逝らぬれとそ死負んる男は男
耳てあままといはれぬ物さうふ奴をいひるは二人の
男の魂つごまもたれらうとひあまう死んあれらうのら
も首らんゆて負耳れらう瓜後松のう此二人のおとこが
あてゆれ方向く堂の天井但入の子より換くの形とそ
うりかひしとそ世習とれまもささるらう其批程
うのあわらそあめあると人の鬼とらひははら

とてきて教明て法流せよとて中を交げよとて
どて文とて賦とて公とて長一方便射ちればよとて
とて抄本いふとてとて中を交ふとて物ありとて
おとろしとてんとして御相とて長ひてとて
乞のまげとてを批の抄の故とてとてとて射
きとてとて抄記ありとてとてとてとて

十一 池澤園四方遺法神神流

今んじつ法公の柳の傍に深きまがゆがたぬとて
よひて深うくつち入りゆくされとてとてとて大
なり滝のまがれとてとてとてとてとてとてとて
んととてとてとてとてとてとてとてとてとて
ろは方より母れは傍に回りたると同しとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
其とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

是ハ人ヲあぞ思よとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
面水水とてとてとてとてとてとてとてとて
滝ハきとてとてとてとてとてとてとてとて
ゆらぬとてとてとてとてとてとてとてとて
あひとてとてとてとてとてとてとてとてとて
焚くとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
ふあやとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
今んじつとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

どうのそのうちからぬ要難なるがよに後家米をりぬぞとて
妻の幼少をいあうりかて月日とすべし同候に候はずとて
鳥鴨子とるころ清氣より後男なりとも衣食をいぬ
せそまきむすこてあしつたれ月日とすべし同候に候はずとて
かうあふい書みく物さるるをさるるわやかくらふとて
あぐと後と候あうまぶくさひて尋れどもあしとの
うらむとく候中をばうらひてわゆるふうのりまはれ
あしれどもきれいりあうわらうとてさるる候あり日客
人来て家々に合ておどりする候まづが客人とてかこうぞ
ちのひをぬ人と出ひてしすめのはがわくゆえんえれ
いりあすんとしんを家より半より半とぬぞいぬ
いりあふりゆんともあ明年の今はいりあふんせんずんぞ
後く後くゆれが家より半より半とぬぞいぬ
今の客が言葉とて文とてあふとてふけ郷の老ども半い

かばも客候をいそのくさるふのさる妻があげさハロふ
そひてゆりゆれは妻より半より半とぬぞいぬ
半あ ねはよとてそのあゆとてさるひつふかーとて
うらとけとていぬは妻より半より半とぬぞいぬ
さひゆんをいぬとてゆえんとの今はいりあふんせんずんぞ
かじつましくなりんとてのくやとてあしつたれ月日とすべし
あしつたれ月日とすべし同候に候はずとて
くわらるるを半より半とぬぞいぬ
妻のいとぬれとていぬは妻より半より半とぬぞいぬ
あしつたれ月日とすべし同候に候はずとて
バカあはれをいぬは妻より半より半とぬぞいぬ
さるるを半より半とぬぞいぬ
け積とてバツとて備ふとて同妻より半より半とぬぞいぬ
さるるを半より半とぬぞいぬ

て瑞籬の月ましく金銀は神のほろろてさうめぬ所なりと
ソバ丈我もさうた可致本あしくはせぬとらふ事刀とあ
えさう丈我もさうとてはせぬとらふ事刀とあ
はは連とひ 瑞籬深きをばしとあひさう共
い男は海濱を拾けりや徳来をそと留りたるふ事
徳連のりつる留めつるえが山のちよ夫なる資金不瑞籬こ
ろくそく廣く四かたをそふと想の上作をそと想の四の
角ふ林をそは近本瑞籬とてけて瑞籬の月ましくてた
因て瑞籬男はとて所のべさ勝の中さうくつら刀以て
さみてらうちあくとと川形さうさうの財よ一乃初のたさうり
わさひら老ば次くの資金のたさうさうさうさうさう
さうりの様さうさうとさうとての資金をさう向かへんさう一
の資金のたさうとあけてさうさうさうさうさうさうさう
長たく歯銀のやうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

事て並れさう一宝金の後行やんがりたさうさうの後魚刀
急者たさうさうは替成さうさうとさうさうさうさうさう
勝さうさうさうさうとさう一宝金の様とさうさうさう
神さうさう様さうさうさうさうさうさうさうさうさう
てさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
とさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
とて年く人とさうさうさうさうさうさうさうさうさう
様さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
つら様さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
様さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
共様さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
とさう様さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
瑞籬さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
のひらと御さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

以保之。廣為家以之。每平人。今令其。板亦。今射。ろんといひて。ふま。矢と。う。ひて。射。んと。ま。れ。後。あ。れ。さ。げ。す。と。際。一。大。願。あ。り。と。れ。さ。う。と。ま。ひ。て。留。り。許。さ。う。と。て。板。等。と。り。や。板。一。粒。ん。ど。ろ。ん。あ。す。け。て。ま。と。つ。ハ。留。り。あ。り。た。り。ま。せ。事。が。ゆ。え。ん。は。ま。ま。あ。る。る。あ。り。ん。ど。と。ま。り。あ。の。も。ま。く。ま。ひ。う。り。男。様。と。し。る。ひ。て。今。方。い。さ。が。余。と。れ。す。と。る。あ。う。え。ん。う。後。あ。り。人。の。あ。に。あ。り。ま。事。と。い。は。ま。ば。さ。射。ふ。射。ろ。ん。と。い。ひ。て。板。と。い。て。二。十。方。斗。つ。て。お。て。返。さ。り。た。ら。う。と。い。は。て。ま。あ。り。く。え。ん。と。い。は。う。り。は。男。其。郷。の。長。者。と。い。は。政。事。と。具。し。て。子。孫。に。く。多。く。の。人。と。は。返。し。馬。車。約。き。と。い。は。相。違。う。形。洋。の。う。り。う。り。と。い。は。ま。り。こ。い。し。り。と。い。は。流。の。人。と。い。は。流。乃。人。と。い。は。ゆ。く。と。い。は。あ。り。ま。り。と。い。は。う。り。と。い。は。り。今。昔。物。終。十。五。

宇治大納言源隆國傳補遺

小野宮右府記曰。治安三年七月廿七日。今日相撲。召合。中略尤少將隆國。尤中辨重。伊入。從日花門。忝上着座。中略五番之間。居上達部。饌尤少將隆國。位四執上達部座第一衝重二合。居余。按小野宮實資公隆國勸盃。下略又曰。八月廿九日。庚申。今朝物忌。堅固。依不用門戶。修諷誦。東寺日者。尤少將隆國。依病。今朝遣書札。下略又曰。治安四年九月。尤近。陳朝床。當上達部下臈。仰可立。馬場殿之由。即改之。次將祠候。少將隆國。位四奉内侍呼來。又曰。萬壽三年七月廿一日。大外紀賴隆。曰。相撲。召仰。按察大納言。行成。卿被御下。廿九日。假依正曆五年例。可行。有二說事也。尤少將隆國右中將顯基居之先例大將次亦仰曰。中辨者。依為裝束司也。隆國曰。按察云。須敷圓座二枚。一度仰兩將。而兄弟間。有所憚。由隆國相觸。又曰。萬壽

四年四月廿一日以正方遣中將隆國許府生宣旨下
○字威後可補之由示之。又曰長元二年七月十六日頭
中將隆國來傳深白消息云前大貳所獻白鹿有麝
之仰可被御覽歟。又曰長元四年正月十一日今日女
叙位仍參入。中略院官給名簿之由賜深白次經奏聞
召男大藏尤少辨經守參仰可召頭少將隆國朝臣之
由。中略隆國朝臣取進名簿。又曰入夜府生公式進手
結中將隆國少將定良着行同四年三月廿四日相撲
中略昨日頭中將隆國四位少將行經相定同年八月
廿三日頭中將隆國傳深白御消息云有月蝕變早被
行仁王會尤可佳。九月十日頭中將隆國來言國相
撲人免田臨時雜役事。為長愁申事。可示遣仰許云。
同廿五日文義朝臣持萊伊勢内外宮禰宜等叙位日
記。中略内外宮禰宜叙位事者仰内記國任少將奉宣

命進御所行步不穩。於陳付頭中將隆國先經内覽可
奏之由相含了。又曰長元五年正月廿三日頭中將隆
國來傳深白御消息云三日行幸日風病重發強以相
杖參入。七日郎會彌以發動。非是風之病先年。○字威言
之時所勞如此。○古事談曰宇治大納言隆國後冷泉
院御在位之間朝恩二誇ルコト無貳ノ故ニ奉為春宮事ニ
於元頗レ奇怪ノ事等アリ。受禪ノ後多年ノ御意趣ヲ思召テ
彼子息等ニ於テ事ノ次ヲ以テ罪科ニ處セラレキノ由。睿慮アリ
時ニ權中納言隆俊殿上ニ參候スル由ヲ聞召。竊カニ小部ヨリ
御覽アルニ容顏人ニ勝レ體骨倫ニ超タリ。著座ノ後顧眄セス。
笏ヲ正クシテ座ス。日日陣中ニ參仕シテ公事一身ニ行フ。未代ニ
於テ無雙ノ御相ナリ。若不召仕。極テ朝家ノ損ナリト思召ス。舍
弟宰相中將隆綱ヲ事ノ次ヲ相待セ給處ニ齋宮寮射獵
陣定之時隆綱執筆書定文其詞曰雖有飲羽之號未見首

五之寶^ヲ云此文ヲ敵感マシクテ近習ヲ許サセ給フ今ニ於テハ
三男四位少將俊明ニ御素懐ヲ果サルベク思召處ニ無程内裏
焼亡ス至上腰輿ニ駕シテ出御アリトイヘトモ雜人等南庭ニ群
リ入テ御安座ナリ難シ然ル處ニ俊明遅急シテ弓ヲ執テ走
リ廻リ雜人ヲ退ケ御輿ヲ安座シ奉ル入御後仰曰今日俊明
カ德ニ依テ耻ヲ見ズ是運ノ未盡ガ故ニ俊明所添也^云
如此ノ間三人皆近臣トナツテ肩ヲ比ル人ナシ

享保十八年正月孟春吉日發行

宇治物語前編十五冊

文化^{丙子}十二月十九日写之

中村直道 収

宇治亞相物語者乃源隆國卿著述而
亨奇節之取改正訂補也大指詳序及
凡例系圖今所寫日本部前編世俗怪
異二傳也而尾亞相君傳補遺者亦蟠
籠子探索舊記附後編之尾茨木方道
謂後編之首予寫時暫加前編之尾

文化十四丁丑正月三日

由布氏某

